

第1節 上郷岡原遺跡出土大麻と大麻の生産過程

榑崎修一郎・渡辺弘幸・石川雅俊・齊田智彦

1. はじめに

上郷岡原遺跡Ⅰ区(調査時はⅡ区東)の4区画の畑から、「麻」と推定される植物遺体が全面に検出された。これらの植物遺体は、平成14(2002)年5月7日～8日に調査担当者の榑崎・渡辺・齊田の3名で実施した、遺構確認トレンチ調査の際に齊田により認識されたものである。但し、その調査時には「麻」とあるという確信は得られていない。

その後、同年5月27日から実施したⅠ区の発掘調査で調査区全面に植物遺体が検出されるに及び、6月7日に「麻」と推定するに至った。その後、6月24日に群馬県内(群馬県吾妻郡東吾妻町三島唐堀地区)で唯一「麻」を栽培している岩島麻保存会会長の丸橋幸一氏と同会会員の丸橋茂氏の両氏に御来跡いただき、間違いなく「麻」とあるという鑑定を行っていただいた。

両氏の鑑定の根拠は、植物遺体の形態が「麻」に似ていること・Ⅰ区の畑の畝及びサクの幅も「麻」と良く似ている・畝及びサクの間が狭いものは土地が肥えている場合で広いものはあまり肥えていない土地である・Ⅰ区の畝及びサクは乱れていないため麻の収穫(麻こぎ)前の状態で浅間山泥流に被害に遭ったと推定されるというものであった。

但し、6月29日に実施した第1回の地元説明会では、まだ確証が得られていなかったため、「麻」の状態は麻の収穫(麻こぎ)前かあるいは麻干しのどちらかの状態であるという表現に留めた。

この両氏の指摘にともない、調査担当者の榑崎・渡辺の両名及び6月30日付けで他遺跡に異動した齊田に代わって7月1日付けで着任した石川の3名で「麻」の調査を独自に実施した。なお、これらの独自調査は、「岩島麻保存会」が主に土曜日及び日曜日の週休日に実施した行事に同行調査させていただいたものであり、発掘調査中に実施したわけではないことを付記しておく。

2. 麻の生産過程

麻の生産過程は、大きく播種・収穫・加工の3期に分かれる。以下に、岩島地区の事例を紹介する。

(1) 播種

播種は、種蒔きと間引きの工程に分かれる。

①種蒔き

4月10日前後に、種まきを行う。この地域には「お播き桜」と呼ばれる桜があり、桜が満開になる時期に麻の種を播くと言われている(文献5)。

前出の丸橋幸一氏の曾祖父丸橋勝太郎氏が明治26(1893)年に著した『櫻木大麻製造実験略記』によると、「毎年4月5日から15日までが最好期であると」ある(文献1)。同様に、「種子一尺毎に三十乃至四十粒を適度として」とあるので、約30cm毎に30粒から40粒の種を播くということになる。

ちなみに、畝と畝の間隔は通常の作物より狭い約25cm～30cmであるが、これは麻を密生させ枝が出るのを防ぎ細く長く柔らかく成長させるためである(文献2)。

②間引き

約10cmに伸びた頃、本数や間隔を揃えるために第1回目の間引きを行う。その後、約30cmに伸びた頃、第2回目の間引きを行う。第2回目の間引き終了後は、収穫までそのままにしておく。

「播種後凡十七八日を経て麻の丈三四寸は伸びたる時」間引きを行うとあるので、約9cm～12cmに伸びた時に間引くということになる(文献1)。



写真1. 約3m以上に伸びた麻畑

[2002年8月3日、榑崎撮影]

(2) 収穫

収穫は、麻こぎ・根切り・葉切り・押し切り・麻煮・麻干しの工程に分かれる。なお、この収穫期は、播種後約108日～115日（文献2）という文献と114日～120日（文献1）という文献の記載があり、若干異なる。この収穫の時期は、7月下旬～8月上旬になる。

ちなみに、天明三（1783）年の浅間山泥流は、新暦で8月5日である。

①麻こぎ

高さ約2.5m～3mに達した麻を、下記のように5種類に分けて根ごと抜き取る。なお、文献により麻の名称が若干異なるが、これは時代差のようである。

明治時代は、「コキノ（小麻）」・「シタソ（下麻）」・「ニカイン（二階麻）」・「ジョウソ（上麻）」の4種類に区分する（文献1）。大正時代及び昭和時代初期は、「長麻」・「中麻（二階麻）」・「短麻」・「太麻」・「屑麻（コキノ）」の5種類に区分する（文献2・文献3）。なお、通常、コキノ（小麻・屑麻）は、収穫せずに麻を束ねるのに使用する。

ちなみに、草丈で比較すると、小麻（コキノ）[1.5m以下]・下麻（シタソ）[1.5m～2.0m]・二階麻（ニカイン）[1.8m～2.3m]・長麻（ナガソ）[2.3m以上]・棒太（ボウタ）[2.3m前後]であり、長麻が最も良質であるという（文献3）。

②根切り

麻切り鎌で、根の部分切る。なお、約3mにも達する麻だが、根は意外に短く、17cm～28cmである（ちなみに、この麻切り鎌は、上部刃の部分が少し反っているのが特徴・両刃で柄が30cmぐらいであるという（文献2））。

③葉切り

麻切り鎌で、葉の部分切る。根切り・葉切りが終わった生麻を、周囲約30cmにして束ねる。これを、3つ束ねて生麻一束という（文献2）。別の文献では、直径約12cmの束を小麻で結束（一クビリ）し、3クビリ束ねたものを半束というという（文献1）。ちなみに、根切り・葉切りで残った根や葉は焼く。

これを、根葉焼きという（文献1）。

④押し切り

生麻は、尺棒を当てて押し切り（押鎌）で、長さを揃えて切る。長麻は6尺5寸（約197cm）・中麻6尺4寸（約194cm）・短麻5尺8寸（約176cm）～6尺（約181.8cm）であるという（文献1）。また、別の文献では、長麻・二階麻・棒太は約2.15m、下麻は約1.8mであるという（文献2）。



写真2. 麻こぎの様子 [2002年8月3日、榑崎撮影]



写真3. 根切り・葉切り [2002年8月3日、榑崎撮影]



写真4. 押し切り [2002年8月3日、榑崎撮影]

⑤麻煮

麻煮釜に湯を沸騰させ、生麻一束ずつ2・3分、最初は根の部分を、次に上部を反対に入れて煮る（文献1）。これは、繊維を丈夫にし、害虫を殺すために行う。この麻煮は、麻干しをした後に、かびを防ぐためにさらにもう一度行う。

この麻煮釜は、明治36(1893)年の『大麻実記』には大釜しか描かれていないため、明治期になって導入されたものと推定される。この麻煮釜は、栃木県の野洲から仕入れてきたと文献にある（文献2）。実際、明治25(1882)年に栃木県の麻の収穫の様子を描いた絵には、すでに麻煮釜が使用されていることがわかる（文献4）。

⑥麻干し

麻煮が終わった麻は、約1週間～10日間、天日に干す。この時、雨に濡れると黒点が生じるために濡れないようにする注意が必要である（文献2）。

明治時代の文献では、木の柵に立て掛ける「立掛乾」と地面に平らに置く「平乾」がある（文献1）。実際、栃木県での明治25年に描かれた絵と昭和10年代の写真では「平乾」である（文献4）。

しかしながら、現在の岩島では、上を束ね立てて干している。いつからこの方法になったかはわからないが、少なくとも明治36年以降であることは確実に、大正時代からであろうか。

(3) 加工

加工は、ねど入れ・麻はぎ・麻挽きの工程に分かれ、この工程も取材したが、発掘調査とは直接関わらないので、ここでは紙面の都合もあるため簡単に紹介するにとどめ、詳細は別の機会に紹介したい。

①ねど入れ

麻を発酵させ、皮がはげるようにする作業。

②麻はぎ

皮をはぎとる作業。

③麻挽き

麻はぎしたものを麻挽き台に乗せ、麻かきで表皮を取り除く作業。繊維を竹竿にかけて、2～3日陰干しして精麻にする。

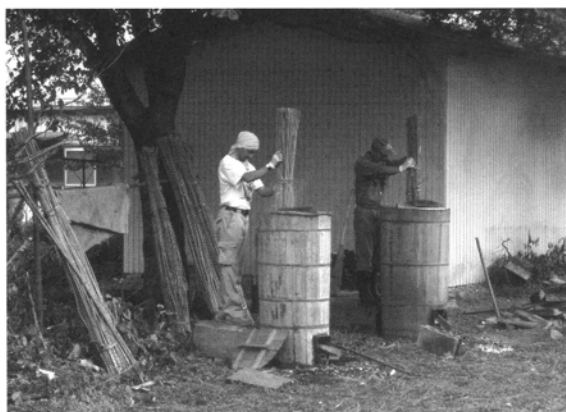


写真5. 麻煮釜での麻煮 [2002年8月3日、榑崎撮影]



写真6. 麻干し [2002年8月10日、渡辺撮影]



写真7. 麻こぎが終わった畑。畝やサクが踏まれて荒れていることに注意 [2002年8月3日、榑崎撮影]。

3. 上郷岡原遺跡での解釈

(1) 畑の畝とサク

上郷岡原遺跡において、確実に麻畑であると推定されたのは、I区1号畑～4号畑である。これら、4区画の畑には、円形平坦面が存在した。それぞれの畑の畝とサクは、しっかりと残っており、全く荒らされていない状態であった。これは、麻こぎ（収

穫) 前の状態であることを示す。この点は、丸橋氏等のご指摘通りであると考えられる。

2002年8月3日の麻こぎ後の観察では、畝やサクはかなり荒らされており、上郷岡原遺跡での状態とは異なることが確認できた。

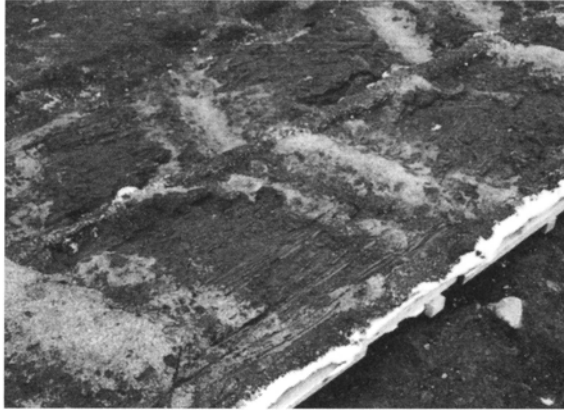


写真8. 上郷岡原遺跡における麻の出土状況

(2) 円形平坦面

I区の畑の円形平坦面は、溝を有さないAタイプのみであった。しかしながら、II区の1号畑及び2号畑の円形平坦面は、溝を有するDタイプのみであった。

I区の円形平坦面の規模は、直径約1.2m～1.95mである。なぜ、円形にこだわったのかは不明であるが、恐らく、半切桶と呼ばれる直径約110cm・高さ約30cmの桶をこの円形平坦面に置いて麻の肥料を作ったのではないかと推定される。また、なぜ平坦にこだわったのかは液体がこぼれないためであると推定される。『大麻実記』によると、施肥は、3回に分けて行うとある(文献1)。

①冬鋤(フユウナイ)

11月下旬に、約30cmの深さに鋤で耕す。この後で、10a(アール)あたり、人糞180㍑及び酒生粕112.5kgを水1,080㍑に溶かして柄杓で散布する。これを2回行う。

②中割(ナカワリ)

3月下旬に、約25cmの深さに鋤で耕し、畑を反転する。この後で、10a(アール)あたり、厩肥5,400kgを均一に土中にすきこむ。

③播鋤(マキウナイ)

中割の後で直ちに、約18cmの深さで耕し、畑

を再反転する。この後、播種の5・6日前に、雑草肥と厩肥を合わせて810kgにし、これに酒生粕112.5kg・人糞540㍑・米糠180㍑を混ぜ、水540㍑に溶かして作る。軟泥状になったら、山形の大団塊として1a(アール)に各1ヶ所練り立てて置く。これを、播種の際に半切桶に入れ、水を加えて攪拌してから畦中に注ぐとある。

現在、半切桶を使用する農法は途絶えており、明治時代の農法が江戸時代に行われていたという保証は無いが、想像をたくましくすると、円形平坦面の解釈は以下ようになる。

・Aタイプの円形平坦面 [I区1号畑～4号畑]

溝を有さない円形平坦面の規模は、直径約1.2m～1.95mである。半切桶の大きさは、直径約110cm。高さ約30cmである。Aタイプの円形平坦面には播種時に半切桶を置いた跡であると推定される。

・Dタイプの円形平坦面 [II区1号・2号・4号・5号・8号畑]

溝を有する円形平坦面の規模は、溝を除いた内側で直径約1.2m～1.55mである。恐らく、Dタイプの円形平坦面には大団塊とした肥を練り立てて置いた場所であると推定される。何故、溝があるかという点と肥があまり強いかえって作物に影響がありすぎるからであると考えられる。

・四角形平坦面 [III区14号畑]

四角形平坦面は、四角に板を回し、落ち葉等で堆肥を作った跡であると推定される。

10a(アール)は、約100㎡であるが、上郷岡原遺跡では、約100㎡毎に円形平坦面が検出されており、大変興味深い。

引用文献

文献1: 丸橋勝太郎 1893 『櫻木大麻製造實驗略記』、私家版

文献2: 群馬県教育委員会文化財保護課 1978 『岩島の麻』、群馬県教育委員会

文献3: 中之条地域行政推進会議・中之条農業改良普及所1982 『吾妻町岩島地区に於ける大麻生産に関する調査』、中之条地域行政推進会議・中之条農業改良普及所

文献4: 栃木県立博物館 1999 『麻: 大いなる繊維』、栃木県立博物館

文献5: 丸山不二夫 2002 『全国に広まった上州岩島の清麻を追って』、私家版